

今月の断酒表彰

- ☆ I・Sさん 吹田支部 断酒五年
- ☆ A・Tさん 吹田支部 断酒三十二年

断酒表彰おめでとうございます。

ますますのご活躍を期待いたします。



平成 29 年 2 月 1 日発行 No.168

編集・発行 事務局・広報部

<http://suitashi-danshukai.net>

ていただき、用意した会場では足りず、会館側の好意で空き部屋も使用させていただき、熱気あふれる初例会となった。

現職で仕事を持っているものにとっては、昼例会を運営していくには困難なところも多数あり、充分な手助けはできなかったが、先人方々のバトンリレーで昼例会 200 回の偉業に立ち会えることを、先人の方々の努力に感謝して喜びたいと思っています。

なおこの年 10 月、事務局長の西内さんは全国(福岡)大会の準備を終え、逝去(享年 59 歳・断酒歴 9 年)されました。

夜間の例会もそうですが、多くの人の断酒への思いが数多く語られ、私たちの今を確実なものにしてくれたこの大事な行事を絶やすことなく、確実に次の世代に引き継いでいかなければと思っております。

【今月の「指針と規範」】 断酒新生指針

三 酒害体験を掘り起こし、過去の過ちを素直に認める。また、仲間たちの話を謙虚に聞き自己洞察を深める断酒の飲びを酒害に悩む人たちに伝える。

惨めだった過去は思い出したくない。誤った生き方を続けたことも認めたくない。そうした傾向は人間なら誰にでもあることだが、われわれの断酒を継続させるためには、そうした事実を素直に認めることが欠かせない。

病気のせいだとはいえ酒に振り廻わされて、自分でもいやになるような行為をくり返した。自己中心的な物の考え方が強くなり、自分の間違いを棚上げして人を理由もなく攻撃し、傷つけた。ときには、暴力すら振るったこともある。

酔いが醒めれば後悔し、もう二度と同じ過ちは犯さないと心に誓いながら、酒を飲むと同じ結果になった。周囲の人たち、特に家族に与えた苦痛は計りしれない。

そうした酒害体験を思い浮かべることは、恥ずかしく、苦しく、恐ろしい。しかし、逃げ出してはいけない。それどころか、記憶の薄れている部分や、まるで記憶にない部分まで掘り起こす努力をし、当時の自分の姿をより明確に頭の中に再現する必要がある。

酒を断ったのだから、暗い過去のことは忘れ、明るい将来の展望のみ考えればよいと思うかもしれないが、そうした発想では断酒は継続されない。われわれと酒の関係をもっとも正確に教えてくれるのは、あの惨めな日々の自分の姿であり、酒によって歪められた

断酒に思う (74)

吹田市断酒会昼例会開催 200 回に思うこと。

南千里支部 土肥 茂

1 月 27 日に吹田市断酒会の昼例会が 200 回目を迎えました。

岸部市民センターで第 1 回目をスタートさせて以来、足かけ 17 年、一度も休むことなく、今日まで続けてきました。

吹田市断酒会昼例会は平成 12 年 6 月 23 日に開催された。

故今道先生から当時南方で開院されていた、新阿武山クリニックに通院している人たちのフォローを大阪北地域で実現できないかと、当時の吹田市断酒会副会長であった黒田さんや事務局長の西内さんらに相談があった。

断酒 2 年目の私はまだ状況がわかりませんでした。黒田さんや西内さんがいろいろと奮闘しておられた。

現在こそデイケアや昼例会は盛んになりつつあるが、当時はほとんど皆無の状況で何から何まで手探りの状況であったと推察する。

アルコール依存症者にとっていかに昼間時間を有効に過ごすかは当時も重要視されており、そのためにも昼例会は有効な手段として期待されていた。

さて、会場も決まり何とか発会にこぎつけたが、事務局長の西内さんが入院するという事態に陥り、突然、初昼例会の司会という大役が私に回ってきた。

二人にお任せの状況でいた私は突然のことに驚き動揺したが、一人で奮闘している黒田さんを見ると嫌とも言えず引き受けた。

いよいよ当日時間がせまり、大勢の人がどんどん集まり始め、用意していた会場から人があふれ始めたころ一台のタクシーが会場に到着し、中から入院中の西内さんが下りてきた。この日の司会のため、病院に許可を得て、外出してきたとのことだった。

おかげで私は司会の大役を解放されたが、入院中にもかかわらず、責任を全うされた西内さんや黒田さんの熱意に驚かされた。

初例会には今道先生や保健所の方たちも参加し

自分の心であるからである。

断酒してある程度日数が経ち、自分を表現する力がついてきたら、積極的に過去の酒害体験を掘り起こし、機会あるごとに話そう。断酒例会の中で語られる様々な話の中で、過去の酒害の実態が何といても柱になる。酒で病んでいた自分の心を詳しく知ることが、断酒継続へのエネルギー源になることは誰も否定できない。

こだわりは場合によってはよくないことだが、われわれが自分の酒害体験にこだわることは重要である。

アルコール依存症から回復する鍵は、酒害の怖ろしさにこだわることである。酒害の怖ろしさが生々しければ生々しいほどその対極にある幸せへの願望が強くなり、われわれは酒に手を出すことはない。

二度とあんな生活に戻りたくないと思うなら、その戻りたくない生活の本当の姿を忘れないことだ。真に平和を願う人たちが、戦争の悲惨さをいつまでも忘れまいとするのと同じである。

ところが、いくら掘り起こそうと努力しても、どうしても思い出せないことがある。その掘り起こせない部分が、記憶にある部分よりずっとしかも、大きく、より重要である。

われわれには、泥酔したときの記憶がまるでない。また、そんなに酔っぱらっていないときでも、記憶の大部分がすっぽ抜けていることがある。そうした記憶にない部分でわれわれは、自分の意思とはまるで関係のない非人間的な行動があったりする。

目覚めたとき、家族の鋭い非難の目に、いったい何をやったのだろうか、と不安になる。ときには、家族が逃げ出していないことすらある。そんなとき、われわれはその原因を知ろうとしなかった。怖ろしいからである。

自分の記憶にある部分は、まだ多少正気があってやったことなので大したことはないが、記憶にない部分には病気の極端な症状が出ている。酒と自分の関係がどんなにひどいものであるのかが証明されている。だから、その記憶にないものまで知ることが、自分の病気の本质を知り、酒を断っていく上でもっとも重要なものになる。

それを知っているのは家族である。特に配偶者が一番正確に憶えている。そして、酒をやめさせるために、あるいは、単に責めるだけのためにすべてを話した。

だが、われわれはそれを認めなかった。酔いが去り正気に戻ったとき、とてもそんなことは信じられなかった。動機がないということだけで、徹底的に否認した。作り話で攻撃されているとすら思った。そうした話を認めると、自分の人間としての価値が失われるからである。

(指針と規範 P15~P18)



【アルコール関連映画紹介】

キャリー・フィッシャーの半生を描く

「ハリウッドにくちづけ」

スターウォーズシリーズ

「ローグ・ワン」が昨年公開

され、今年はいよいよ「エピソード8」が公開！という中、

レイア姫役で有名なキャリー・フィッシャーが、昨年12月23日にロンドンからロサンゼルスへ向かう飛行機内で心臓発作を起こし、到着したロサンゼルスに緊急入院したとの報が世界を駆け巡ったのは、つい先ほどのこと。

一時は一命を取り留め安定したと伝えられたが、12月27日に容態が急変し死去したとのニュースが報じられた。享年60歳、まだまだ活躍が期待される年齢であり、今後のSW作品に必要な不可欠の存在が星に帰った事実は、世界中のファンの悲しみを誘う大事件となってしまった。

今回、彼女への追悼の意味を込めて紹介するのは、彼女が自身の過去の薬物とアルコール依存から立ち直るまでを綴った自伝的小説、「崖っぷちからののがき」の映画化である、1990年公開の「ハリウッドに口づけ」という作品だ。

「スター・ウォーズ」のレイア姫で有名な女優C・フィッシャーが、薬物とアルコールの依存症を克服したものの、1985年には睡眠薬と処方薬を誤って過剰摂取し、病院に救急搬送された。

この時の経験を元に書いた小説で、フィッシャーさんは自分の薬物依存症や、母親との時に困難な関係について、風刺的に描いた。

小説発表から3年後には自身で脚本化し、メリル・ストリープ、シャーリー・マクレーン、デニス・クエイド出演の同名映画「ハリウッドに口づけ」となった。

(好評レンタル&発売中)

